

医子雜話

三



490.4

Ij-3

3

No. 150



富士川文庫

628

政西夏雜話卷之三

浪花岩藿齊編

八十一難經を秦越人の作は処と、元の滑伯仁の序は
初て之より、然共史記扁鵲傳其外の史籍も越人
作と云夏志と不見、依作者の評論諸家區々也、
然子文苑英華第七百三十卷は、唐王勃の難經
の序有、

黄帝八十一難經序

唐王勃

黄帝八十一難經是医經之秘录也、昔者岐伯以授黄



帝黃帝、歷九師以授伊尹、伊尹以授湯、湯歷六師以授太公、太公授文王、文王歷九師以授醫和、醫和歷六師以授秦越人、始定立章句、歷九師以授華陀、華陀歷六師以授黃公、黃公以授曹夫子、夫子諱元、字真道、自云京兆人也。

大同類聚方殘篇一冊子有跋、文治元年十一月、典藥頭丹波良康書也、曰、醫方之在于我邦也、自神世矣、神國之民服他邦之劑、而何應其惠也乎、人應其土地、而有稟氣之僻、其土人服其土宜、不可無効也。

也。中畧全ク素問ノ吳方法宜論ニヨリテ書タルハ皇

朝ノ古ハ專素問靈柩ヲ用ヒタヒシ、夏ハ續日本記

云、天平宝字元年冬十一月癸未、勅曰、如聞頃年

諸國博士、醫師多非其才、託諸得選、非誰損政

亦无益民、自今已後、不得更然、其須講經生三

經。中畧針生者、素問針經明堂。云云此針經ハ靈

柩ノ夏也、本邦ノ医書、其名存シテ其書傳ハラズ、惜ム

ハキノ甚ナラズヤ、

藥性大素、和氣清、廣長子廣世作。

大同類聚方百卷

安部真貞出雲廣貞

攝生要決二十卷

物部廣貞

金蘭方五十卷

管原岑嗣奉 勅与諸
医同撰

掌中方一卷 輔仁撰

医心方三十卷

丹波康賴作或云丹波雅忠

倭名本州

大医博士源輔仁奉 勅撰

難經開委一卷

廣貞撰

集註太素三十卷

小野藏根撰

養生抄七卷

輔仁撰

養生秘抄一卷

靈蘭集

細川勝元

全編存シタルハ医心方和名本州二書ノミ藿梅ルニ

近末大同類聚金蘭方頓医欽神遺方上梓ナレ共

多クハ偽書也京地御室御文庫ニ有ル大同類聚

真本ナレ共可惜不足有リト云近末尾陽大守御世

話有リテ真本全部スト御藏也東道作子話也

信而上田の百姓は目の中より星の掛るる時、咒子抄を傳

人有鹽と水と汲入れ、板柄杓と水と汲か

の目と兎も眼中の星盪の水よりつゝ々々頰々愈
 ころりしこれ其星一ツ有時ハ一ツニツ有時ハ二ツ水より
 移は也妙く云有ツトハ此法不傳る殘念也 二川隨筆
 近來導水管ニゴム製ヲ用ユ銀管モ用ユサレ共エ合
 不宜ヨウニ覺テ了後才有吉子モ毎度試ミレニ兩様共
 エ合不宜ト云矢張鯨ノサグリ宜シキヤウ也夫ニツキ一話
 有外家海老池某男一便閉ノ者ヲ療ス銀管ヲ用
 水氣ハ通シタレ共管後ケズ後ヤントスレバ茎中疼後
 クフ不能據ナク病者ニ其訣ヲ説キテ心抱ラサセカテ極

南無阿彌陀佛ト不思稱へ無^難引後レニ後ケクハ跡ヨリ
 出血多クシ共亦他匠治療ニテ愈タリト云是全ク銀
 管ノ蠟ツケ熱氣ニ依テユルニ茎中ニテ引掛リタルモ
 ノ也可笑更ナラズ外科ノ心得ベキ更ナリ海老池男ハ
 嚙心配シツランナレ共他匠ニ後セテハ一向ニ耻ヲノコヌ也
 幸ニ能モヌカレタリ臨時ノ過ナハ是非ナシ病者ノ痛苦
 モ思ヒヤルベシ依テ道具ノ類能ク心ヲ用ヒ疎畧ナ
 キコソ簡要ナレ

近來除痘一壓勝

飛上好辰砂 壹匁

麝香 五厘

唐胡麻 三十六粒

右三味ノ薬五月五日曉六ツ時板ノ上ニテ

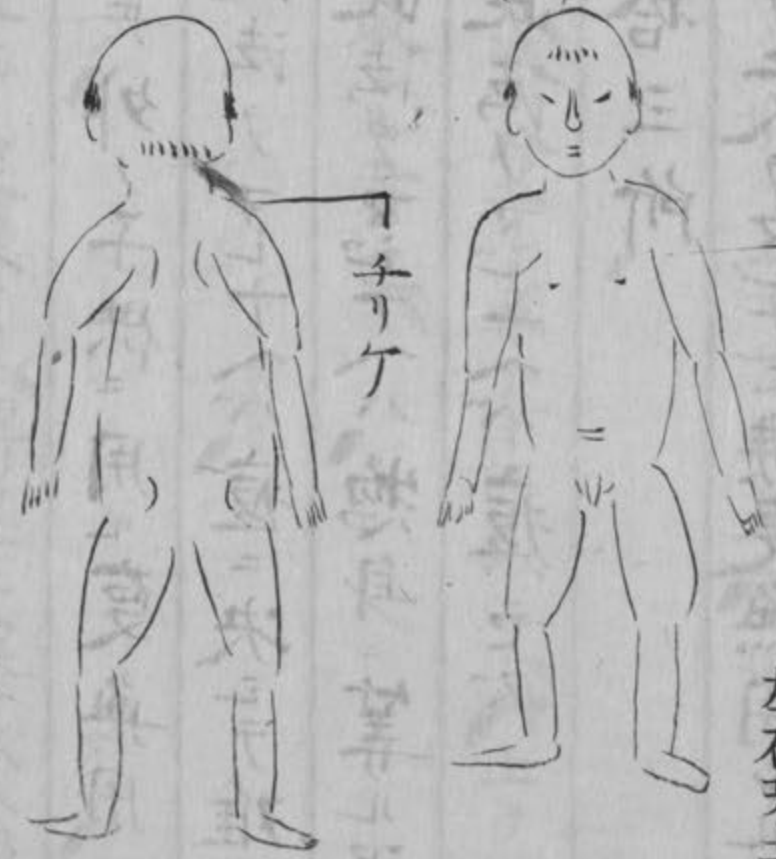
唐胡ノヲ押潰シ辰砂ト射香ヲ交能ク

煉交器ニ入午ノ上刻ニ小兒ノ惣身十三

処ニ新筆ニテ塗ル也

此薬ヲ煉水ハ端午曉天ノ露ヲ取用ル也

小兒一人ニ薬拵ル人モ一人ニ限ルベシ



左右共脇ノ下

左右共土フマズ

チリケ

左右共

ヒツカ、ミノ真中



大如此

藥余ル共外ノ子供ニ用ル莫無用

壹年此法ヲマシナヘバ痘ニ決ニテ難ナシ

ニケ年此法ヲマシナヘハ惣身ニ算ル程出也

三ケ年此法ヲマシナヘバ痘セズ

惣身拾三所

但モ人ヲ二人ヲマシナヒ候莫無用タルベシ

マシナヒ一人ニ小兒一人ト限ルベシ

残リノ藥筆墨共一時ニ川エ流スベシ

右ノ法何ノ比ヨリ始リシヤ不知奥而辺ヨリ出タル方トア

ヤ聞ケリ

端午ノ露水ハ漆塗ノ盆ナドヲ以テ舂上ラハラヒオト

ス時ハ多ク取ル者也

灸ノ四花ヲ點スル足ニテ定ムヘキラ得ラサハ腕代ヘ用是ハ葛

可久カ十藥神昏ニ婦女纏脚ノ者ハ非其生成

故以手取之ト云テ、謬解シタルニヤ、纏脚ハ宋ノ中葉ヨリ、貴女娼妓ノ類ハ、幼ヨリ足ヲ纏ヒ、紮ケ、約メ長ク育セシメサルヲ、貴人ノ体面トシテ、紮脚セサルヲ耻トス。中下ノ女ハ、常ノ足也、纏足トハ、甚小サク、穴処ノ則ニナク、故、纏脚ノ者ト別テ云ヘリ、日本ノ女ハ、脚ヲ紮サレ、足ニテ取コト論ナシ、昔ハ、纏脚ノ夏ヲ知ラス、女ヲ立セテ、齋ヘ、匠人ノ頭ヲ指入ル夏ヲ嫌ヒテ、手ニテ取、夏ト思ヒ誤ルニヤ、

鑑定乳母法

乳婦腋臭者

脊部灸点多者

乳根垂者

乳汁濃者

乳汁以黑漆盆灌之、乳汁流跡有如米飯者

色黄者、以上下品有毒不堪用

先以黑漆盆灌之色清白、色乳傍盤大乳

内有小塊不止不下者、以為好、若偏上偏下

乳汁黄色、臭氣味過甘者、皆不宜、或有惡

海く巧か野辺のワくハヤミの遠き

永住里よりかへりて人

近奉田夫野人、早旦新汲水ニテ戴カスレハ忽

平愈ス又病者ノ居間、忽張置モ可ナリ

身躰カユキハ痒ノ字ニテ其文字ヲ知者不珍ノユソ

ハユシト云文字ハ何ゾヤ

人之手心抓而不痒人之足心抓之則痒者何也

蓋人之手心通心氣心屬火故不痒人之足

心通腎氣腎屬水喜靜故痒 蠶海集

中山三柳ハ土佐ノ道壽ノ才子ニテ濃州大垣ノ田左

門氏族ニ仕官シ有ニガ病氣ニナリテ御イトニ願

ヒシカ共御免有ラサレハ再ビ匙ヲ取メシトテ御イト

ニテ申請京都エ蠶居セラレシガ素ヨリ良医ノ褒シ

有レハ人皆ツトヒテ胗脈ヲ乞是非ナクテ門才ニ云付

薬ヲ合サスルト雖嘗テ治療セズ

後水尾院ノ御脈ヲモ伺ヒ奉リ又醍醐工隱居セシ時

罪なくくさすら身ノ楽ニと今朝の寐芝先芝

後水尾院三柳醍醐ニ山居セーとウー召て

先にもく入ふのやれ也へき今住をぬ山のかくよ

ト云一首ノ御製ヲ下サル難有支ニコソ三柳醜醜ニテ

飛鳥川醜醜隨筆ヲ著スニ川隨筆

急驚卒中風沖心諸卒死ホハ刺絡シテヨシ針穴ハ尺

沢委中ヲ刺絡スヘシ尤木綿ニテ堅ク巻キ始ニ吞セラル

レハフランドインカンフルヲ一ニ盃飲セ刺絡スヘシ刺シル

跡ヲカンフランドニテ洗フベシ

或田舎ノ童子栗ノ毬眼ニ刺シテ板ベカラス次第ニ痛

強ク腐爛シテ不治眼科モ効ナカリシカ或一人袖ノ黒

霜ヲ多ク口中ニ含マセテ少シモ言フ夏ナラヌ位ニ含マ

セ心気ヲツメテ安坐セシメ真綿ヲ以テ眼胞辺ヲ撫

テサセケレバ真綿ニ引カリテ毬後ケ取レタリ

或童子遺尿ノ病アリ自分ニモ雅儀ニ思ヒ或夜木

綿糸ニテ陰茎ヲ括リ卧シタリ次第ニ便気ヲ催ス

ニ付テ陰茎浮腫疼痛忍フベカラズ次第ニ腫脹

糸クヒ入リテ糸ヲ切ル夏不能手ヲサユレハ痛強ク故

涕哭スルヨリ外ナシ一人彼小童ヲ裸躰ニサセテ新

汲水ヲ一桶頭上ヨリカケケレバ不思夏故冷寒ニ恐動

セラレテ陰茎縮リ忽糸脱ニシリ

婦人経閉ノ症ニ小柴胡湯香蘇散合方ヲ服セシムル

ニ有妊者ハ不愈不妊者ハ腹中疼ノ愈アリ痛后

必悪汁ヲ多下シテ愈ル也度々予効ヲ見ル

小児頂上ノ一所ニ髪ヲ剃リ欠きク鬃きおク倍ニ是

と饅頭とス又衣服ヨモ両腋下と欠き明けク腋

下ヨリ氣と泄ヲ皆是發生の氣と泄スル為ニ出ル

教也

按近來歳の満たる婦人腋下と明けク趣意相違セリ

秋の比雷ニ落リ死ニヤビクも碎ク如クて手

足と取レクあつク魚ノ様と取キと板ノせてヤ

リ返リ人の教多クヤセ射とテリはヤテ物

身ノゆる夏ニ夜三夜及ベテ初一日ヨリ後ハいつ

取ク潤出ク三日後ハヤリク物ノ様ニ取ク五七日

塗リ多キバ常の如ク取リ也 窓のすまゝび

或人云筍と多食ク何ヨリ多クテ面目カク取リ

其外板の如ク取リク若クハ一に糸筋更ニ取

カクハ加賀の國の人未リたる扇子賣是見テ

妙法をてしるは用ひしとて薬を調へて二貼許
 咽へ入りぬは少く和らきくつろぎ也是ハ妙何ち
 美ヤと同多きハ甘州をてし加賀とて扇の
 骨を製する。甘州の水子浸しぬれハ志かやふ
 柔き人の伝也夫と女寄あつしと答へ日上
 三河の國巨海村天祥山長壽寺伽藍有今ハ二宇の
小庵許有
 尼僧有齒二十歳許容躰顔色女青とめたまは
 惣身の肉ハ中人よりハ女肥る方まき言語女くとも
 此尼十四五歳の比より女食也後尼はち一月ニ三度

裡食すきは可也と云唯折る女ヲ湯と吞許也迄き
 年と信別善光寺系詣す自然に不食如政香川
 子と此病と論じて不食病と名付るは
 賀川玄悦子玄子産論或問男女之弁谷曰不知也
 問左男右女之説曰非是也凡孕皆當任而居申
 爲物所壓則左右側其右者兒之頭居焉左者兒
 之下身居焉云倍説ニ左孕右孕ト云ハ本據ナキ
 復ト思ヘルニヤ修行道地經一ノ卷云
 陰成敗品第五其小兒在母腹中處生藏下熟

藏上男兒背外而面向內在於左脇也女子背母而面向外處在右脇也

阿毗達磨俱舍論九分別世品第三云若男處胎母右脇向背蹲居坐若女處胎依母左脅向腹而住若非男女住母胎時隨牙起貪如應而住

瑜伽師地論二本地分中意地第二之二云又彼胎藏若當為女於母左脅倚脊向腹而住若當為男於母右脅倚腹向脊而住

按より仙説より托こまると見ゆ

瘥截よ芥子人參黒焼ニ味粘飯より煉合て頼眉の間に○大より貼る一は臍中にたゞ置

物といひは時分よ張はおはる昨八時より癸了今日九ツ半よりハ落やまゝ昨九半より癸今日八時よあまハ落ふく西形圖説

酒を飲て面色赤くは公の微形物也色の青くちる物ハ肝の微ちる物也故に色の赤くちるもの酒カ公の臍を助る友谿達とわいゝ物よ収ひ面色

の青くある物ハ酒カと肝の臓ハ借す故怒と世後
 元来謀_レ血の官たる肝と悍_レ故色_レ理屈也
 常人伏して寝るものハ病_レ長病伏_レ生
 と云る相法の書よて見_レ尚_レ他年病者と
 識_レ十_レ一_レ差_レ匠書_レ非_レ相書
 子_レ相法の書ハ元来素難_レ穴所と定
 免部位骨格是_レ多見_レ
 腹の小さ者ハ疾_レ大者鈍_レ猛_レ
 獅子_レ如_レ者_レ画圖と_レ腹小_レ

虎豹又是_レ次_レ腹勿論_レ豺狼犬馬と_レ才
 子_レ腹大也牛極_レ腹大_レ極_レ是
 常理也人_レ勝_レ腹の大_レ者_レ交合の
 時精早く漏_レ相法の書_レ在_レ大_レ不_レ差_レ肥
 大_レ豊_レ満_レの人_レ反_レせ_レ

蕪明礬之方

蕪根の中と穿白礬と納寒水_レ曝_レ乾_レ時
 臨_レ其礬と出_レ取_レ眼病を治_レ俗_レ
 是_レ蕪明礬とい_レ傳_レ尤_レ驗_レ有_レこ_レ花_レ

子眼病ヲ用ふる本草ニ載之くとも燕明
礬の法ハ不見 以上西形圖説

正月元日天子屠蕪白散屠嶂散を召上ら敷千瘡
万病膏と云ふ膏薬を御額と御耳の後子付流
ふ夏有膏薬の名と忌てクウヤクと称す也
江次第子見へたり膏薬の名とに忌流り膏
薬と付流ふききるも其実ハ用流る伊勢
藏武藏録忌名不忌 家平

藏武藏録忌名不忌
実ノ條

當時ハ膏薬と不称油と云ふ

天保八年の比京地より一医耳より血を取頭痛症瘵血
病キ撲留飲疝氣一切の若と治療と又奇し一時ハ
宜敷姿形ハ去後ハ瘵瘦不且多しと

東都赤坂元氷川家敷中間誤テ蛇子ヲ吞腹中脹疼
して苦痛堪カメカリシニ或人串柿ヲ剪シ多ク飲ミ
メケルニ遂ニ平愈ニ及ヒ一命ヲ全クス

犬咬傷ハ急ニ鍼ヲ用テ瘡口ノ四辺ヲ刺テ血ヲ出シ又五六
人ヲ集メ其圍ヨリ倍大ニ尿ヲカクシ頻リニ尿ニテ瘡
ヲ洗桃核胡桃核ヲニツニ割肉ヲ去半辺ヲ取其内エ

糞ヲ一盃ニ入レ瘡口エ入一方ヲ掩ヒフセ穀ノ上ヨリサヲ
 以テ大灸百壯スベシ若人糞乾穀ルハ又別ニ右ノ如
 クシ百壯追スル也如此スレハ瘡口ヨリ血水又油ノ如モノ
 ヲ流其血水出ル程ハ五三日モ一日ニ百壯ツ、毎日灸ス
 ヘシ其跡ヲ酒ニテ洗イ后能又クヒ瘡口エ膽凡末ヲ塗
 布毛綿ニテ卷ヘシ血水出ル内ハ灸スヘシ灸スル時ハ酒
 ニテ丹凡ヲ洗フヘシ血水止タラバ丹凡雄黄ホ分付置ヘ
 シ又天南星屏風ホ分細末モ可也内服ニ韭絞
 汁ヲ取一盞宛七日クニ飲七々四十九日迄ニ七盞ヲ

飲ハ毒内攻ナシ又升麻葛根湯ヲ用テモ可也又頭
 面杯ニテ焚人尿用ヒ准キハ味噌汁ヲ口ニ含度々
 吐掛テ洗テ后葱白ヲカミ爛シ傳又杏仁ヲ嚼塗
 テ可也併焚人尿ノ效ニ及カメシ又内攻スルモノ
 唯治也舟車丸ヲ用テ効有古今医統血尿十四五
 度モ下セバ毒尽テ全活スベシ民間備荒録
 或民間ノ秘灸疝ヲ治スルニ效有



右ノ灸ヲ五壯程施セハ極テ大効アリ

京地産科清水大學ト云人有姓ト血塊ト多年區別

ヲ考エ居ラレシ由種々工夫ヲ疑セ共十人ノ内ニ三四血

塊ノ夏モアリ又血塊ト體ニ谷エシニ姓ノ夏モアリテ兎角

十二七八ハ的中スル夏稀ナリ三四十年來工夫ヲ疑シ

考エケレ共不明白漸天保七
申歲考エ發明スル如何様ニシテモ

ワカラシカ發明セト云ワレシ左モ有ニア尤ニ覺フ

西洋家ノ詔ニ蘭人ヒ、ーラントト云長瘧ヲ病テ種々ニ治

療スレ共不治ナキクヲ長服ス如何様ニシテモ不治

或時髮結奎中ニシテ云フ貴兄ノ病一瘵ニ治スヘカラス

予治療ヲ任スヘシ極テ効驗有ルヘシト云依テ試ニ

任セケレハ尺沢ヨリ多ク血ヲ取タリノ頓ニ平愈ニ及ヒ

タリケルト云夫ヨリヒ、ーラント云究理ノ学モ極テ無効

經驗ヲテハ益ナレト云テ此医ハ一切究理ハワカラヌ

モノト云レ由尤ノ説也ト瘧ハ邪塊去テ勢カヒナク

無批血氣不順ナル処ヲ刺絡シテ治シタル也

日本唐蘇白散ヲ進ル夏ハ人皇五十二代嵯峨天皇

御宇弘仁年中ニ初ラルト也元日ニ唐蘇散ニ日

二白散三日二八峻嶂散 公夏根元

本綱方

赤木 桂心各七 防風 一兩 菝葜 五分 蜀椒

桔梗 大黃 各五分 又七分 烏頭 二分 赤小豆 十四枚

月令廣義

大黃 一分 桔梗 川椒 一分 五分 白木 桂心 一分 八分

烏頭 一分 吳茱 二分 防風 一兩

医林集要

防風 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

川烏頭 白木 菝葜 各一分

白散方

白木 桔梗 細辛 一分

峻嶂散

麻黃 蜀椒 細辛 防風 桔梗

生薑 白木 桂枝 各五分

右方大同小異アリ和倍年始必磨其模散ヲ服如ヨリ老ニ

至ル多シハ紅絹袋ニ包除夜ヨリ井中ニ釣リ下ケ夜間ニ取

揚ケ酒瓶中ニ浸ニ置元旦服之家々磨其模方異同

有リ、元来、屠ノ字ヲ屠ノ字ニ改用工^ニ尸冠^ニヲ忌^ニ故ト

ゾ、今大路道ニ改メラレシト云傳ス

醫統正脈

明吳勉學集素問以下四十三書、
總号医統正脈。和漢名數

素問 四拾四卷

靈樞 十二卷

甲乙經 十卷

難經 十卷

中藏經 八卷

傷寒論 十卷

金匱要畧 三卷

證治活人書

傷寒明理論 四卷

宣明論方 十五卷

原病式 一卷

保命集

病機 三卷

傷寒直格 三卷

傷寒標本 二卷

傷寒医鑑 一卷

傷寒心要 一卷

傷寒心鏡 一卷

儒門事親 十五卷

医学尧明 一卷

脾胃論 三卷

内外傷辨惑論 三卷

活法機要 三卷

蘭室秘藏 三卷

医壘元戎 一卷

此夏准知 二卷

湯液本草 三卷

痲論萃英 一卷

脉訣指掌 一卷

濟洄集 一卷

外科精要 二卷

丹溪心法 五卷

格致餘論 一卷

局方發揮 一卷

證治要訣 十二卷

證治要訣類方 四卷

傷寒瑣言 一卷

傷寒家祕的本 二卷

殺車槌法 三卷

傷寒一提金 四卷

傷寒截江網 五卷

明理續論 六卷

脈經 十卷

以上四十三部

本草綱目李時珍云梧桐子大如胡椒 云云

凡方書云彈丸大和名ハ雞頭大茨実和名鬼鬼ハスノミ

東都の外科某

姓名

療治子文氣行

効驗甚

急ち其一二と云云或諸侯の姫君股の間子

腫物出来す婦人の夏ちれを療治甚一よくし

然子此醫招請す老女子腫物の姿ととくと又

叔姫君子女子裾と侮く法と云云入入鉄と入

きく鳥渡剪く其急ちるる妙也也叔其上へ

膏薬と貼三四日よ愈ち又或所子小兒

鉄と持居く其過失有る人を恐れ取人

とと誤く版入腸出衆皆駭く彼外

科是を見く是ハ焼切し外子療治ち夫も
 不苦るやと云ふ衆皆是非ちとて諾し其法を同
 匡云く鏡を二三面火の如く焼夫も焼切る也但
 焼切時ハ合圖をすべし夫迄ハめんち心とすべしと
 て手拭とて息をかきし臥さしむ板鏡と飯銅
 の中へ入き火もちろし頃彼匡夫今と声を掛けて
 つめたき鏡とあらしめ彼見ハ冷扱と不論ひ
 やとびつろせしかば腸腹中へ收まり或士刀
 と腹へ突立血出る夏夥し彼士何の是しきの

夏とて血氣よとやる彼外科是と視て中ら左
 様の血氣よとや法ふるまちし先遺言え
 ち仕玉へと云彼士女し臆し遺言と書き法ふる
 次才し血氣衰へしを血の出るも自然子
 止しあり皆氣顛の治療面白し

或人云鰻鱺を食して土常山を食すハ相反と云
 或人料亭に去り鰻魚を食す忽腹痛す亭主云
 土常山と食すや何ぞ食らばき夏有胆しと
 之暫拙し得ふ然し前子焼餅二筒を食す外

ち主云く是ちん内の餡ハ是砂糖密を用ひ
 糖蜜の製土常山を煎煉し黒糖を加ふ者なり
 是土常山と反あると云へし人夫有先年生洲
 一行人飯路途中して赤小豆餅を食し腹痛
 して死せし人有り是類ちんり或旅人旅り
 ず旅者子總に章魚を食す是処に醋有りや
 と云主の云醋ち木醋なる者有ると云即命どそ
 章魚子浸し食し一二筒を罍中に餘し去暫而
 旅人未報日是より二町余処行斃め人有りと云

主云く如何なる体も旅人云年三十余篋笠布衣
 旅人也と云云前子我亭に於て鮓魚を食す極
 て其旅人ちん彼食せし鮓魚尚一二残まりと
 磁罍を視きハ二筒形大なり満盆初と知
 ば彼旅人章魚食せと木醋と相反其可恐也
 と

按木醋ハ阿州ニテキズト云柑類にして不甘和
 倍リニト呼者也漢名宜母子廣東新語西
 國より多し京橋ハ稀也他品ハ醋の代とす

痘 上古我邦亦無痘疹、中古稱豌豆瘡、見于續日
本記、蓋囊欽曰、嘗筑紫漁舟、漂隨於新羅國、
則漢父染此病而飯、尔来世人羅于此疾病
也、然無時世可考之、未知是否耳、東濃山人惡
之尤甚、以是數万家之間、無罹此疾者、假令有之、
不過百之一分耳、當此時、則移深山幽谷之中、無
人問疾、故病者得全命、亦鮮矣、蓋世人不避之、
則病之、山人深避之、痛惡之、則不病之、何也哉、
信曰、但此病有神司之也、蓋神者、物用不測、

無方無躰、而何不至之有耶、若有神司之、則
蠢頑山人、胡夫避得之乎、方昏所論、皆是
胎中積毒也、然則山人亦豈無胎毒乎、雖
然不病之何也、二疑姑記之、俟明者之決耳、
痘疹為毒、尤重為亶、受以來、溫積惡毒、深久
之故、古稱曰百歲瘡、謂人百歲之中、必不能免、
痘疹心印曰、余考痘之為症、上古軒岐、秦越
人淳于公輩、未之論列也、自東漢建武中南
陽征膚、染流中國、然則痘肇于東漢也、
率繩

赤裳瘡ハ昔より疱瘡と裳瘡と云ふより云ふ人
麻疹ハ天長の頃より有り一説ハ赤裳瘡ハ
今の水痘の夏也麻疹ハ天正四年丙子の歲始
て西土より渡来り其後百十三年を經て元録四
年辛未より二度流行夫より四十年目享保十五庚
戌より三度又二十四年よりして宝曆三癸酉より四度
又廿四年よりして安永五丙申より五度又廿八年
の享和三癸亥より至り流行甚夏天正の初度より
六度より及登り

孔子曰良藥苦於口利於病良藥忠言之利虽
似知之其實反人不知之何也美味爽其口諛
言其耳故嗜厚味快口不知病伏於臟腑

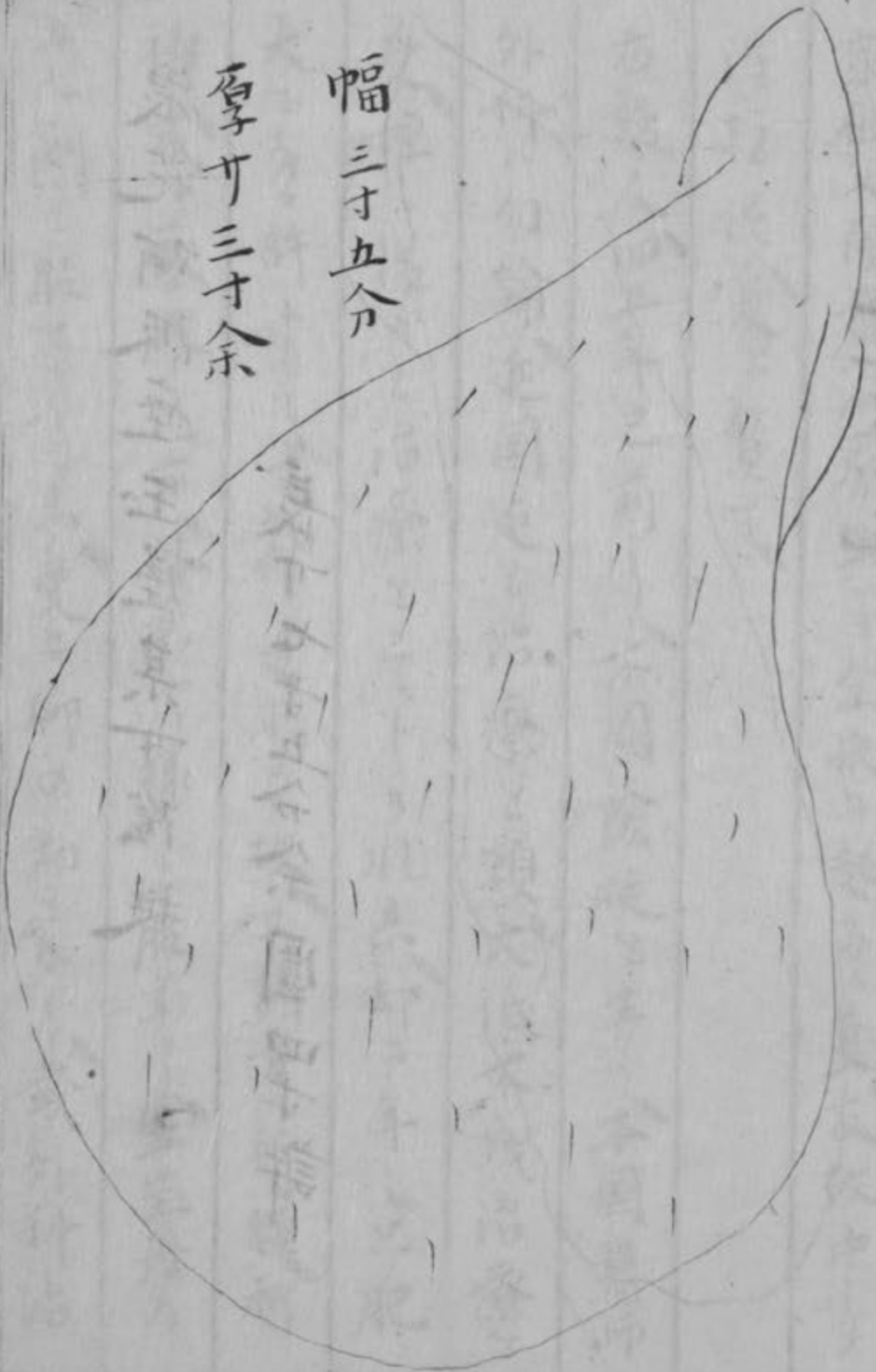
陽氣勝者ハ夢不覺陰氣勝者ハ夢と覺ふと云故步
行ハ山坂の嶮岨と渡りく不時発汗より大に亡陽
て勞小困睡せし夜ハ草卧く何夏も不可覺却
て大に夢と見寐かぬ也是陽氣と込す故ちり
夢ハ覺ゆと不覺と在り親如是と傳送識と
申さるハ亦理あり

腑中阴阳二氣、氣交ニ流通スル、夏ニ暑寒中冷水ヲ、
飲スル、小便暖カク、極暑中、熱湯ヲ飲スル、小便大
傷セラルハ、陰陽二氣、其程ヲ得ズ、大過不及ナル、
バ也。

苦手、靈樞官能篇云、爪苦手毒為夏善傷者可
使按積、抑痺、手毒者、可使試按、龜置龜於罍下、
而按其上、五十日而死、生、手甘者、復生如故也、

按子俗子苦手ト不者有、蛇杯ト拈ク、自由ナル、不追
来京地子按腹者、名ヲ一人有ク、積痛杯ト治ル也、

加賀國某女陰挺、長可五寸八步余、



幅三寸五分

厚可三寸余

浪花阿波座玉屋某女陰挺

長寸七寸五分余圍四寸許



色紫黑色

賀州金沢産某女歳二十歳余陰挺を生、略圖右の如く、
家祖父隆恭治療致し全快し趣多々復反故中より
得たり、俟爰に贅す、

右婦人四五年已前より不圖陰挺を生し、本国醫師
外科ハ勿論、近国迄も治療と頼大低不残治療と
受種々様々と治療と受し、凡共却二年、只肥
大なる許し、一寸知し是れ胎き故、又諸方へ祈頼祈
禱或ハ壓勝咒方、内葉子ハ様々と服第、五宝丹の
五七劑と服せし、其更に聊の効となく、或外科治

療と施す。琴の系子高美と塗子夫と以て陰挺
 と拵りしめり。故、浮腫殊外強くありると針を拵
 出血ると多致し。心身を悩ませし。復も有りし種
 の苦疼と思ひ種々様々と医術とをこし。此上を
 治し不申共京都の大医に治療を願ひんと通し。其を
 出所し直將諸方を吟味し凡共治療を施しをすしと
 云。醫師方と取く是より大坂の見物亭より上りて
 西国辺と趣治療を拵り。慮見の折一條殿侍医
 久米昌軒方へ参りて治療を願ひし共是亦致

方無方と昌軒先より差圖有りし。外科夫にも見せ申
 有りし。名前四五軒認められし。野子名前も
 有りし。故相説き来り依て病症とくと聞質し
 其の陰挺に其旨を申聞け猶久米氏へも同業
 のる。故慮見考拵り上りて治療致す。其
 扱昌軒へ面合せし。病者腫物此年子及び未一
 見せ也症。汗面の至形なり。手段工夫も有不申
 何分貴兄可然治療致し。其旨と。是とす。其旨
 故尚亦再三病者へも教諭し。飯定の後澄文

と取日限を約し治療後一を遂に平愈し及ぶ
飯国致しり也

右陰挺平愈後三年許りして男子出生したる趣
て報恩亭再び上京致し昔日の恩と喜び
特産物等持来せり一月許り滞留度く高
倉二條祖父の旅宿へ来りり其頃隨身の
門人國友氏田中氏高木某おと物語ちり時
享和元年四月比の夏也と聞

文政八年正月二日阿波座玉屋某廿三十年来痔

疾の旨申来往診して委敷容辨り聞しニ痔疾ニ非
ス得ト診スルニ陰挺也形圖ノ如ク色紫赫色時々望ノ
凝結男陰ノ如ク疼痛ス云所謂双生ト云形ニ似テ人
予陰挺ノ元工薬線ヲ掛ケ卷膏月膏藥ヲ又貼シ置シニ
一宿ニシテ膏爛セリ膿水涌出次才ニ形小ニ九日追テ
元ノ処ヨリ切断貼膏月十日平愈セリ形ノ珍シ
キ候筆記スル者也

世俗之病者則互相告曰命在食唯強之令服食也
愚哉言也夫多食反助病邪雖平人縦口味則

疾病必生矣况病者不軍轉其支躰而肱裏之水穀無由變化故凝滯於腸胃而營衛為是不流行由是病邪豈不蜂起乎故衛生者平生女食淡薄而使胃腸安其克化之氣是惕然警者於未病之間而已野語述說

病愈而忘匠言病瘡則輕藥餌之功且反忘報匠以謝德是故心胸熾慾火之妄焰而燔灼一點冥明之真元遂不脫病網徒歿於非命者予目擊系之多々也說苑曰病加於女愈其此之謂也同上

漢書藝文志五藏六府疝十六病方四十卷師古

曰疝心臟氣痛音山諫反音刪トアリサニ音ナ

唐韻會正韻茲所晏切音訕又廣韻所間

反集韻師間反音山義同トアリ人多セニ音ニ呼ブ

サニ音アルトヲ不知

龍耳龍ノ耳角ト云龍ハ耳有ツテキコエズ角ニテ

聞也故ニ龍耳ト書テ龍耳ト云字ヲ唐ニ於テ書キ

ハシノレ也伏見本教寺日宣上人甲存問答書

今大路道三伏見桃山御殿ヨリ大急ノ御療用ニテ御

二付イソキ參殿セシカバ跡ヨリ藥竈ヲ持走リケル殊
 外重キ故ニ遲カリケル漸持テテ御玄關工持行ヤ
 否道三遲ヲ咎メラレケル僕殊外重カリケルト申セ
 シカバ汝ハ役ニ立ヌマツナリ藥竈ノ重サハ斗目
 也夫カ持テヌ様ナ者ハ今時ノ役ニ立ヌセトテ叱ラレ
 ケルト也夫由ラ大閤内々聞シ召シテ道三エ御尋
 アリケル藥竈ノ重サ何程有ルヤト仰ケルニ道三
 云具足一領ノ重サナリト谷ヘレ肥後守ノ詔

屠蘇酒 屠蘇本古庵名也當從ノ字頭故魏揖

作廣雅釈庵以此屠蘇二字今以為孫思邈之庵名
 誤矣孫公特書此二字於已庵未必是屠蘇之字解
 之者又因思邈庵出辟疫之藥遂曰屠絕鬼氣
 蘇醒人魂尤可笑也其藥予嘗記三因方上有之
 今日酒名者思邈以屠蘇庵之藥與人作酒之故耳
 藥用大黃配以椒桂似即崔寔月令所載元日進椒
 酒意也故屠蘇酒亦從女至長而飲之用大黃者予
 聞山東一家五百餘口數百年無傷寒疫症每歲
 三伏日取葶藶一束陰乾逮冬至日為末元旦五

更審調人各一匙以飲酒亦從女起批葶藶亦大黃
意也孫公必有神見今錄方於左

大黃 桔梗 白朮 肉桂 各一兩
八錢

烏頭 一兩 菝葜 二兩

右剉為散用袋盛以十二月晦日日中懸沉中令至

正月朔旦出藥置酒中煎數沸於東向戶中飲

之先從女起多女任意一方加防風 一兩 明師仁寶七修
類藁

香川牛山翁筑人ナリ孝ヲ見厚損軒ニ受_レ匡_テ崔原文

益ニ學_ブ其著_レ旨數種世ニ行_ハル頃日其方考_ナ

ナル者ヲ見ニ八味丸ノ條云此ノ方ハ漢武帝消渴

ヲ患玉_ヲ時張仲景是ヲ用_テ効_ヲ得_ル妙劑也ト

アリ按_ルニ張汝ハ李漢ノ人ニテ漢武トハ其間三百年

ヲ隔_テリ翁ノ談博是ヲ考校セラレサリシハ何ゾヤ

或魏武ノ夏ヲ誤_リシニヤ此誤吳山甫カ方考ニ

始_リ士佐道壽ガ口訣ニ再_ビシ又此旨ニ著_セリ_一匡

人ノ學問ニ疎キ和漢同日ノ談ト云ベシ講餘談

外科正宗瘍腫門敷藥藥方車前子菴簽五龜銀

花石四味鮮草葉一処鳩爛加三年陳米即糲衣

者云云、糲字諸字昏、糲漿トノ注メ不詳、居家必
 用ニ、鉄刀布ヲ洗糲スル法アリ、按ルニ洗糲ハ今云洗張
 也、曰搗松子肉洗則滋潤不脆、糲時入好末茶少許
 或煎麻茶酒搭色入香油一滴薄糊、糲之又糲粉
 ヲ造ル法アリ、細白粟米一斗朴消四兩、皂角三箇、搗
 作濃汁、右先将朴消用滾湯泡開、證定去其沙泥、
 卻与皂角汁相和、先将米用沸湯泡兩三次、然後將
 滾湯豁在缸罌内、將米投入、就将皂角汁投入攪勻
 五六日便爛、依常法造トアリ

掌心足底者、人身之末梢也、其氣通內、故用巴豆下
 利不已、漬足於水中、則利忽止、医学救弊論
 按衄血甚時、降氣スルニ足ヲ水中ニ浸セハ止、近來蘭茨脚
 湯ヲ用是亦一理有リ、能應スル者也

或小兒三歲、衄血不止、三日、衆医不能療、束手無如之
 何、柴胡四物湯加象牙末與之、衄血頓止、同上

浪花ノ土地殊ニ儼毒多シ、按ルニ元素遺毒ヨリ、堯ル有
 又傳染シテ病アリ、又粉毒ニテ長ク病ムアリ、其丹土地
 ノ水氣ニ依テ、堯ル有土地水氣惡水ノ上、食物好惡

ヲ不論高味膏粱ノ物ヲ食スル土地ノ風ニテ其上迄
 来四五十年前ハ不食種々ノ穢魚吳魚河豚并鳥
 獸肉ハ申ニ不及鳶鳥龜杯迫賤者食用ス所謂噉
 倒レノ土地ニテ上下共ニ常ニナリ難禁去ルカ故ニ腫
 物類ハ三都ニ比スレハ別シテ多シ昇平ヲ續上下自
 由ノ上肝氣強自ラ養生不行届ニナル故ニ短命ノ
 人多シ何レモ及ハ又大望ヲウワタテ工夫ヲ凝シ肝膽ヲ
 クダキオゾツト定命ヲケル姿アリ邵康節云人ノ定
 命ハ百二十歳ヲ定命也馬ハ三十年雀ハ三年ア定命ト

アリ左スレハ百二十年ノ齡ヲ保タズ共食禁保養ヲ專
 一トセバ自然ニ病者ニヤノ長壽ノ人モ有ニ乎

痘神何神也姑勿深考或曰居岷嶺山姐妹三人身著
 麻衣蓋女仙之流主人間痘疹之疾人呼為麻娘々
 云神甚靈驗而嚴于小節疾痘之家為位奉之
 言語稍不檢衣物稍不潔及誠敬少懈者病者
 輒作神言語訶譴之虽私隱無不昭揭其甚者
 痘或不治為得罪於神也靈異之跡不可勝紀
 然亦非妄禍人者吾鄉陳君洪書兒時以痘死

置於東廂其母撫而哭之坐於尸限卷而假寐見三麻衣婦人入室視見驚曰向幾誤此望都宰也可放還言畢出戶去母驚覓見已甦去後果仕望都懸令罷官歸今猶在由是觀之痘殤者非盡神之為政也其亦數之前定者歟

耳食赤清乾隆中之人撫州樂宮譜元叔蓮裳ノ編述

永正ヨリ天文ノ間武州河越ノ産導道ト云シ人明エ渡リテ十二年逗留シ帰国ノ後良医トナル此才子一溪道三也又名医ノ聞ヘアリ

丹波雅忠名医ニ依テ百濟國ヨリ請セシ夏朝野群載ニ見エタリ

痰咳甚シク夜不寐者ニ用テ多年ノ苦痛ヲ忘レタリ

トテ出テ来ル其方ヲ尋子シカハ紀加田夫詔此方有効

生雞卵ヲ一箇ワリ白糖十匁雞子ニテ

煉服用ス大効有奇々妙々ト云予未試

遺尿灸方糸五火灸

女右

十

男左

右灸或故家秘灸也漸ニ其傳ヲ得タリ一穴也上下

四點ハ飯点也脊推エエセテ點ス十四堆 男左 女右

痢病ニテ呃逆スルモノ毒ノ上攻ニヨル者アリ一老人痢中

呃逆ヲ灸ス一劑ニ升ル時ハ止ム前匠補法ノ劑ヲ與ニ

ヨルノ致処ナリ依テ下劑ヲ與ヘテ全愈鎌田碩安詔

三河の國百姓滿平ハ福艾の岁へあるもの也東岡舎筆

記云三河國寶飯郡水泉村ノ百姓滿平慶長七

壬寅年右同國同村ニ生レ寛政八丙辰年百九十四

歳也享保年間云ノ慶賀ニヨリ徵レテ江存ニ参リ

白髪ヲ献セ御米若干賜フ一説月俸ヲ賜フト云ヘリ今茲丙辰

年獲マイレリ享保ノ如シ前後イツレノ日ニヤ吏人

滿平ニ問フ汝カ家何ノ術アリテ長生如此ナリヤ答

テ言他ノ技ナシ僕カ家先祖ヨリ相傳ノ三里ニ灸

ス其灸方毎月朔ヨリ八日ニ至テ輟ム年中月別ニ間

断アルコトナシ其數不同如左

右朔八壯二日九壯三日十一壯四日十一壯五日九壯六日九壯七日八壯八日八壯

左朔九壯二日十一壯三日十一壯四日十一壯五日十一壯六日九壯七日九壯八日八壯
寛政八年滿平百九十四歳妻名氏百七十三歳子名氏

百五十三歲孫名氏逸百五歲曾孫以下尚百歲ニ滿サル

モノ多有ト云滿平カ敷地ニ靈水アリ其井底悉辰

砒ナリ古来ヨリコノ水ヲ汲用ル故ニ一家カクノ如ク長生

スト云ヘリ但コノ夏傳聞ニアリ虚実ヲ詳ニセサレトモ

異聞ナルヲ以テ録玄同放言

三言物ノ其ノ對ニ來ニ歸リ時其ノ三言ニ

此平ニ聞ク其ノ來ニ歸リ時其ノ三言ニ

手懸ナリト云ク其ノ對ニ來ニ歸リ時其ノ三言ニ

鑿夏雜話卷之三終

